

書評

Leo Bersani

Receptive bodies

University of Chicago Press、2018年、135頁

大矢 悦子*

1. はじめに

『受容する身体』は、レオ・ベルサーニ（1931-2022）の名著の一つである。本書の裏表紙にある紹介文によると、ベルサーニは次のように語られている。「精神分析、セクシュアリティ、そして人間の身体に対する刺激的（provocative）な問いによって知られ……」。“provocative”とはなんと適格な表現であることか。この言葉を調べると、人の怒りや関心のほか、性欲を「刺激・挑発するような」という意味が存在する。確かにベルサーニのテクストは、人の怒りや関心を刺激し、また性的に挑発する効果を持つだろう。象徴的であるのは、かつて男性同性愛に関する論考が学問の場において台頭し始めた1980年代において、勢いを増しつつあった「ゲイネス」というあり方に対し、ベルサーニが「冷や水を浴びせかけた」（村山 2022:262）出来事である。とりわけエイズ危機以前に積極的に唱えられていた、セクシュアル・マイノリティであることは即時的にラディカルな政治的立場を持つことにつながるという主張に対し、ベルサーニはそれを否定し、またそうした主張にみられる脱性化の傾向に警鐘を鳴らしたのであった¹⁾。同性愛者へのヘイトが渦巻いた1980年代のエイズ危機当時において、「性的な」存在とみなされることを肯定する仕方でアカデミアの言説を批判することは、差別への加担行為と捉えられかねないある種の賭けであっただろう。しかし、ベルサーニの魅力とは、まさにそうした挑発的（provocative）な問いを提起する態度にあるのだと私は考える。時流に乗り、欺瞞を含み込んだ立論によって差別への抵抗を試みることを、ベルサーニは拒絶する。

さて、本書もまた、受容性／非受容性に関する provocative な問いを私たちに提起するものである。“receptive”という語は、感受的・受容的と訳される。“receptive”自体、「外界の刺激を受け入れる」器官や能力を意味し、ま

* 大阪大学大学院人間科学研究科共生学系博士前期課程；u140185g@osaka-u.ac.jp

た、receptive anal/vaginal sex のように、挿入される役割＝「ネコ」におけるセックスを表す形容詞でもある。(補足として、名詞形の“receptor”がネコを指す語として存在する)。本稿において取り上げる『受容する身体 (receptive bodies)』のタイトルには、ここから、二重の意味を読み取ることができる。つまり、感受的・受容的である身体と、ネコであることの身体である。1980年代に巻き起こったエイズ危機の最中、87年に発表された『直腸は墓場か?』のなかで、ベルサーニは、ゲイ男性らに向けられた「殺人的」な表象——それはソクラテスの時代から続く「挿入される身体」への嫌悪によるものであると主張される——に対し、ネコであることの価値を凄烈に論じてみせた⁽²⁾。クィアの歴史において「クィア」という語の意味合いが侮蔑から積極的な自称へと転じられたように、ベルサーニはこの論文においてネコである(あるいはそのようにみなされる)ことを肯定したのである。

2. 本書の概観

本書『受容する身体』では、序文で断られているとおり、受容性 (receptive) あるいは非受容性 (non-receptive) に関する体系的な議論はなされていない。ベルサーニは、エピグラフとして「人は決して結論づけるべきでない」というフローベル⁽³⁾の言葉を引用している。なぜ本書において体系的な議論は退けられ、結論は放棄されるのか。その答えを探す際、非受容性の主要な例として、サディズム的な支配への情熱が挙げられることに着眼できる。ベルサーニが第1章のなかで示唆しているのは、暴力は模倣衝動の欲望からなるということだ。非受容性とは、一つには模倣による暴力であり、受容性とはそうでない仕方によって開かれた快楽であることがここから読み取れる。したがって、受容性についての体系的な研究を行い、何かしら結論づけるというのは、それ自体、模倣を促す非受容的な営みである他ないのではないだろうか。

ここに収録されているのは6つのエッセイ的な文章 (essayistic writing) である。それらを通し、私たちは受容性／非受容性に関する事例に触れることができる。第1章「クソ喰らえ! (Merde alors)」では、サドの小説が原作であるパゾリーニ監督の映画『ソドムの120日間』の内容を追うことで、物

語と暴力との関係性について考察をする。第2章「なぜセックスか？」では、フロイトのテキストにおける脚注の意図を読み解くことで、精神分析に対立したフーコーの『性の歴史』第一巻における思想を、フロイトと接続させることを試みる。第3章「官能的な吸引力と社会性」では、精神分析とミード⁽⁴⁾の思想を繋ぐことで、吸引にみられる独我的な快楽について考察する。第4章「前進することの力」では、ラカンの理論を用いて、D.H.ロレンスの『恋する女たち』に表れるルパートとハーマイオニーの関係性について考察する。第5章「受容性と中に在ること」では、睡眠と性的な挿入に特徴的である、人間の身体の根源的な受容性としての二重のリズムについて考察する。第6章「見つめる (Staring)」では、1999年の映画『人間性 (Humanity)』における残虐性から、「見つめる」ことの現象学的分析をする。本書評では、ベルサーニがフーコーの思想を引き継ぎ、覇権的なセクシュアリティの権力構造に対立するものとして受容性における快楽を提唱していることを踏まえ、フーコーと精神分析の考察に入る第2章から内容を追っていくこととする。その上で、非受容性に関する「最も極端な例」である第1章を見ることで、受容性の「非体系的な」側面について確認していきたい。

3. 快楽と受容性

本書は「情熱は快楽の妨げである」という一文によって始められる。この情熱と快楽との対比は、フーコーが『性の歴史』第一巻のなかで示した対立の再定式化 (reformulation) を図ったものであると述べられる。フーコーはかつて、精神分析的な欲望の解釈学ではなく、身体的快楽にセクシュアリティの権力構造に対する抵抗の可能性を見出そうとした。ベルサーニはこの欲望を「情熱」であると読み換えたいうで、「情熱は受容性を固定し、あるいは遮断することで、快楽の可能性を閉ざす」(p.vii) と主張し、快楽と受容性との関係に焦点を当てる。つまり、本書において受容性は快楽へ至る契機として捉えられ、対する情熱は非受容性の例として挙げられる。

かつて『性の歴史』第一巻において、フーコーが精神分析を手ひどく批判したことはよく知られている。フーコーによると、セクシュアリティとは歴史のなかで私たちの存在の鍵であるとされ、権力によって語ることを奨励

された概念である。「精神分析が人間の主体に関する非歴史的真理として私たちに受け入れるよう求めているものは、フーコーにとっては権力行使の歴史的産物である」(p.2)。しかしフーコーは、セクシュアリティの権力構造に対抗するための新たな構想を、私たちに満足に与えることはなかった。「セクシュアリティの展開に対する反撃の結集点は、セックスの欲望 (sex-desire) でなく、身体と快楽であるべきだ」(pp.23-24) というフーコーの文言に対し、ベルサーニは以下のようにコメントする。

おそらくフーコーは、解体している文化的表現のネットワークのなかでの彼自身の位置付けに制約され、今引用した文章に暗黙的に示されているわずかな概念化以上のことをすることはなかった。(p.24)

また、ベルサーニはフーコーの「身体的な快楽」が、いかにして権力構造の外側へと放たれるのかという点について、疑念的に指摘している。

彼は「セクシュアリティの策略と、その組織を支える権力」から解放された「身体と快楽の異なる経済」(Bersani 2018:24) を呼び起こした。私にとっては、その喚起の最も弱い部分は、欲望の解釈学に対する快楽のいささか謎めいた抵抗である。あたかも身体的快楽が、欲望的幻想の精神的操作の外側で優先され、おそらくは再発明されうるかのよう。(p.24)

「新たな身体的快楽」は、どのようにして権力の網の目をくぐり抜け、覇権的なセクシュアリティに対する抵抗要素となることができるだろうか。ベルサーニはその重要なヒントとして、ロレンスの『恋する女たち』という作品を取り上げている。ロレンスは、フーコーが従来のセクシュアリティの権力構造を批判するとき用いた作家であるが、奇しくもこの作家の作品のなかに、フーコーの理想とする「新たな関係様式」のモデルは存在した。ベルサーニはこのことを以下のように書いている。

フーコーが『恋する女たち』を読んでいたかどうかは分からない。もし読んでいたなら、フーコーが「新しい関係様式」と呼ぶもの、とりわけ、もはやセックスを中心とせず、相手の人格、さらに言えば相手の欲望の秘密に対する脅迫

的で侵略的な好奇心を中心とする親密さの様式を、ロレンスのなかに、もう一人のより初期の使徒として認識したであろうし、そうすべきであった。(p.24)

『恋する女たち』のなかに描かれる「新しい関係様式」とは以下のように説明される。

ルパートは、性的な愛という想像上の融合を超えて、アーシュラとの結びつきを求めて奮闘している。…(中略)…二人は“完全に宙吊りにされた均衡のなかで不動であり、肉体的存在の純粋な神秘的節点 (nodality)”となるのだ。性的な交わりから解放された、ある種の恒星のような静けさのなかで、一緒にいながら互いに距離を置いている。ルパートは、「愛している」と言うことは、「私」、「エゴという古い公式が死語になれば無意味になる」と主張する。新しい二元性のほとんど想像を絶する一体性は、それぞれのなかにエゴのない個人を保持するのである。(pp.23-24)

ロレンスが『恋する女たち』のなかで描く関係性は、受容性を読み解く上での重要な示唆となる。しかし、ここで喚起するべきであるのは、受容性とは決して模倣の上に成立するものではないという注意である。先に見てきた受容性の例に対し、少なくとももう一つの非受容性の例を捉えることで、私たちは受容性というものの非体系的な性質を知る必要があるだろう。したがって、本稿では次に、第1章での非受容性の例について内容を追っていきたい。この章のなかで描かれるのは、「人間の主体があらゆる受容を遮断し、他者を主体的意志の奴隷と化す最も極端な例」(p.vii)である。

4.非受容性としてのサディズム

第1章において扱われる映画『ソドム』は、崩壊するファシズム国家から逃れ出た4人の放蕩者 (libertarian) たちが、村の少年少女を攫い、囲い込み、サディズムに満ちた楽園をつくり出すことによって展開される。ダンテの『神曲』に倣い、ストーリーは「地獄の門」「変態地獄」「糞尿地獄」「血の地獄」と進行していく。サド原作の小説では「黒い森の奴隷宮殿」であった舞台が、ここでは局地的なファシズム国家の再現へと置き換えられている。映画を通して放蕩者たちは、自身の性的快樂のために、少年少女への苛

烈な残虐行為を遂行する。

ベルサーニがはじめに着目するのは、少女とのセックスよりも少年とのセックスの方が良いという放蕩者の主張である。

悪はほとんど常に快樂の主要な魅力である。このように考えると、罪は自分と同じ性質 (sort) の存在に対し犯すときの方が、そうでないものに対し犯すよりも、より素晴らしく現れるはずである。(p.2)

男たちと少年の身体は、少女の身体と比較したとき、ペニスを持つという点で対称性を持つといえる。「もしエロティックな刺激が、知覚された、あるいは空想された他者の興奮に依存するならば、他者を最大限の興奮状態に追い込むことが合理的になる。放蕩者の勃起を促す震え (vibration) は、被害者の苦痛が目に見えて強まるのに比例して増大する」(p.3)。このとき、知覚／空想される他者の興奮は、拷問者のなかに快樂として再現される。ここから導き出されるのは、「マゾヒスティックな衝動とサディスティックな衝動の間には完全な同一性がある」(p.6) という事実である。サディスティックな快樂とは、自身のなかに再現されるマゾヒスティックな快樂である。ベルサーニは、「ファシズムはサディアンなセックスに最も適した政治体制である」(p.7) という結論を導き出す。「犠牲者の苦悶は、処刑人の性的興奮へと精製される」(p.7)。

ここで議論は非受容性から、受容性へと転換される。ベルサーニは先の結論から逃れる道を私たちに示唆するのである。

おそらく、このような結論から逃れる唯一の方法は、非模倣的セクシュアリティに関する説得力のある理論を提示することだろう。つまり、性的興奮を、もはや他人の興奮の空想的表象に依存することなく説明できるような理論である。ある意味で、このような作業は非常に困難である。なぜなら、それは単にサドに代わるものを提案するだけでなく、フロイトに代わるもの、ひいては私たちが模倣的刺激の技術において受ける大規模な訓練に代わるものを提案することになるからである。(p.7)

もちろん、この「非模倣的セクシュアリティに関する」理論とは、先に挙げられたフーコーの思惑と接続するものである。ベルサーニはこの章の後半

にかけて、非受容性のもっとも極端な例として見てきた映画『ソドム』を、今度は受容性の例として再度検討していくことを企図するのだ。

まず指摘されるのは、サドの小説では「黒い森の奴隷宮殿」であったファンタジックな要素を、監督パゾリーニはファシズム国家の再現として歴史的な文脈の上に捉え直していることである。また、醜悪な召使いであった4人の語り部は、みな平凡な顔立ちに置き換えられている。歴史的に身近な文脈にサドを置くことは「文学的テキストのグロテスクさを薄める方法の一つ」であり、召使いたちの容貌を醜悪でなくすことは、「彼らの相当な知性と優雅さを無視することを不可能としている」(p.8)。パゾリーニはサドの作品の「疎外的な側面」に不信感を抱き、それを取り除こうと手を加えている。

例えば、暴力からの頻繁な場面の転換には、主題に固定されること、あるいは、固定化されることそれ自体を拒否するかのような姿勢がみられる。また、画面にみられる美的要素もその一つであると考えられる。パゾリーニは、「私たちの美的注意を心地よく分散させることで、暴力の物語の中心に直接集中させないようにしている」(p.10)のである。その結果、パゾリーニは「猥褻な行為や暴力的な行為を切り離して拒絶するという物語上の贅沢を私たちから奪う」(p.10-11)。「サディズムから私たちをそっと遠ざけるのは、私たちがサディズムから暴力的に遠ざかるのを防ぐためだと思われる」(p.11)とベルサーニは推察する。美的な要素に惹かれ、私たちはサディアンたちとの共犯関係を受け入れる。しかしそれは、私たちの「暴力への模倣衝動」を奇しくも封じ込めるのである。ベルサーニはこのことについて、以下のように述べている。

サロ (Salò) におけるパゾリーニの最も独創的な戦略は、サド的な主人公たちに同調することで、彼らから距離を置くことである。パゾリーニは、自分自身を切り離そうとするものを複製しているのだ。… (中略) …サロと文学テキストとの関係は、破壊的な受動性 (passivity) の一つである。(p.13)

作中において繰り返し描かれる模倣的な行為や音楽について、「サロにおけるパゾリーニの見事なトリックは、反復と複製を、模倣的な技法ではなく、距離を置く技法として用いることである」(p.13)とベルサーニは書いてい

る。私たちはパズリーニの映画を鑑賞するなかで、意図せず、暴力に対して受容的な態度を取るのだ。

5. おわりに

ベルサーニが本書『受容する身体』で提起した「受容性」という概念は、私たちにどのような快樂の広がりをもたらすだろうか。あるいは、私たちは依然、非受容性にとらわれ、サド／マゾヒズム的な情熱へ耽溺するのだろうか。ベルサーニが述べるように、私たちは日頃物語のなかに暴力を封じ込め、固定することで、その出来事との快樂的な同一化を味わっている。もちろん、そうした振る舞いは、(狭義的な意味での) 性的な場面に限らない。私たちが持つありふれた暴力性の話である。もし、そういった暴力性にうんざりしたならば、受容的な実践を試してみるのも良いだろう。ベルサーニに導かれて受容的な身体の可能性を探るのは、読者のあなたにとって刺激的ではないだろうか。

注

- (1) Bersani, 1987. *Is the Rectum a Grave?* *October*. 43(Winter):197-222.
- (2) 同上
- (3) ギュスターヴ・フローベール (1821-1880) 『ボヴァリー夫人』などで知られるフランスの小説家。
- (4) ジョージ・ハーバート・メッド (1863-1931) プラグマティズムの研究等によって知られるアメリカの思想家。

参考文献

- Bersani, Leo. 1987. *Is the Rectum a Grave?* *October*. 43(Winter):197-222.
 村山 敏勝 2022 『見えない欲望に向けて』 ちくま学芸文庫。
 フーコー、ミシェル 1986 『性の歴史 I 知への意志』 渡辺 守章訳、新潮社。